

「教育臨床総合研究13 2014研究」

## 平成25年度の基礎体験領域の取り組みについて

## A Report of Approaches on the “Basic Experience Area” in 2013

藤田 耕 一*	寺 井 由 美**
Koichi FUJITA	Yumi TERAII
村 上 幸 人**	光 森 智 哉**
Yukito MURAKAMI	Tomoya MITSUMORI
長 岡 美 沙**	大 谷 修 司***
Misa NAGAOKA	Shuji OHTANI

## 要 旨

島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」を実施してから10年が経過し、1000時間体験学修を修了した7期目の卒業生を送り出すことができた。また、今年度2月には「1000時間体験学修 10周年記念シンポジウム」を開催し、学校現場等に出た卒業生がこの体験学修をどのように活かしているのか検証を行うことができた。

ここでは、平成25年度の「1000時間体験学修」における基礎体験領域の取り組みの概要、さらには基礎体験におけるアンケートから見た成果等について報告する。

〔キーワード〕 基礎体験領域、基礎体験におけるアンケート、成果と課題

## I はじめに

「1000時間体験学修」は、1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であり、「基礎体験」「学校教育体験」「臨床・カウンセリング体験」の3つの体験領域から構成されている。

基礎体験領域は、小・中学校等での学習支援、学童保育、地域イベント、社会教育などの教育活動や地域活動への参加を通じて、教師に必要な資質の土台となる社会性や豊かな人間性を養うものである。さらに、子ども、地域、学校と主体的に関わり、多様な体験をもとにした教育実践力を育むものである。基本的な流れは、各事業所が行う様々なプログラムの中から、興味・関心のある体験活動に参加し、活動を通して自分の課題に「気づく」、その課題の解決に向けた活動の方向性を「つかむ」、活動への取り組みを「深める」という段階を経て進めていくものである。また、活動にあたっては附属教育支援センター専任教員が、事前・事中・事後指導にあたり、学生の学びがより充実したものになるように支援を行い、学生は体験で得た学びを4年間で積み上げていく。

\*米子市立福生東小学校（前島根大学教育学部附属教育支援センター）

\*\*島根大学教育学部附属教育支援センター

\*\*\*島根大学教育学部自然環境教育講座（前島根大学教育学部附属教育支援センター長）

また、活動を通して身につけさせたい資質・能力として10の力（学校理解，子ども理解，教科の基礎知識・技能，学習支援の指導技術，リーダーシップ・協力，社会参加，コミュニケーション，探求力，社会の一員としての自覚，リテラシー）を設定しており，評価の具体的観点としている。

各活動の事後指導や各基礎体験セミナーの振り返りの際には，これらの観点をもとに活動記録票の振り返りシートに自己評価をさせ，自己認識や課題意識の深化などの自己成長を促している。

## II 基礎体験領域における取り組みの経緯

1000時間体験学修がスタートした平成16年度から平成25年度までの，10年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点を表1にまとめた。平成25年度の改善として基礎体験セミナーと実習セメスター，そして卒業生及び就職先への聞き取り調査等の3点を挙げている。

基礎体験セミナーでは，4年生における「発展期セミナー」において，従来の学生発表ではなくパネルディスカッション形式を取り入れるとともに，フロアーの学生との意見交換の場を設けた。実習セメスターについては体験先の園や学校から提出していただいた学生の様子についてのアンケート調査を集計し，分析したものを園や学校に送付した。

また，10年目を迎えた1000時間体験学修の成果と課題を把握するために，昨年度「1000時間体験学修 追跡調査アンケート」を実施し，今年度検証を行った。詳細は「島根大学教育臨床総合研究 2014特別号」に掲載しているが，2月にシンポジウムを開催し，今後の1000時間体験学修の在り方について考えた。アンケートの結果を見る限り，1000時間体験学修での学びは大きく，卒業後，学校現場で「子ども理解」「教科指導」「学校理解」等で役に立っていることが多いという回答をいただいた。

表1 10年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点

○：実施，－：未実施，△：試行，◎：改善

	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
事業所との連絡協議会	－	－	○	◎	○	○	○	○	○	○
実習セメスター学外教育体験	－	－	○	○	○	○	○	◎	○	◎
ピビットひろば	－	○	○	○	○	○	○	○	○	○
事前・事後指導の実施	－	－	○	○	◎	○	○	○	○	○
各学年の基礎セミナー実施	－	－	○	○	◎	○		◎	○	◎
だんだん塾講演会	－	－	○	○	◎	○	◎	○	○	○
基礎体験活動記録票	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○
入門セミナーI	△	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○
基礎体験合同説明会	－	－	○	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター説明会	－	－	○	○	○	○	◎	○	◎	○
社会教育施設との意見交換会	－	－	－	－	○	－	－	－	－	－
学内資格認定（3資格）	－	－	－	－	○	○	○	○	○	○
卒業生及び就職先への聞き取り調査等					△	－	－	－	◎	◎
専任教員数	2名	4名 ※1	4名	4名	5名 ※2	4名	4名	5名	4名	4名

(注) ※1 H17以降1名は鳥取県から，※2 H20のみ1名は特任教員

### Ⅲ 平成25年度の取り組み

《末尾に資料として「平成25年度基礎体験領域における年間活動実施一覧表」を掲載》

#### 1. 基礎体験活動

##### (1) 基礎体験活動への参加実績

今年度は、表2のように、延べ2600名近くの学生が、島根県・鳥取県内で体験活動を行った。受入団体の年間活動募集総数も773件であり、幅広い分野から多様な体験活動が募集され、募集数も年々増加している。学生は自己基準をもとにこれらの活動を選択し参加している。

また、卒業要件とされる基礎体験（選択）400時間に対し、今年度卒業生の平均体験時間は632.1時間であり、平均232.1時間も多く基礎体験（選択）に取り組んでいる。このことから学生自身が体験学修の有意義感を理解し、積極的に体験を積み重ねている学生が多いことがわかる。

表2 基礎体験活動への参加実績

	H19実績	H20実績	H21実績	H22実績	H23実績	H24実績	H25実績
受入れ団体数	225	226	266	295	277	264	353
募集活動数	369	451	475	504	511	508	773
学生参加活動数	341	338	340	375	400	348	559
参加学生延べ数	2012	1898	1953	2397	2478	2285	2571

さらに、「松江サタデースクール」や「出雲市ウイークエンドスクール」等の基礎学力向上事業での支援活動にも継続的に取り組んでいる（表3）。松江サタデースクールは、H24年度は、小学校での活動がなくなり募集も半減したため、参加も減少している。活動の中で、現場の教師や塾長との連携の下に、地域の子どもの教育実践に積極的に参加している。教員志望の学生にとっては、この活動は貴重なものであることは言うまでもなく、子どもに対する言葉がけや関わりについて体験活動を通して培い、事後指導の様子からも自己の成長が実感できているように見える。

表3 土曜日を利用した学力向上事業への参加学生の人数

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
出雲市ウイークエンドスクール	25	32	40	31	31	33	31
松江サタデースクール	95	105	88	64	65	39	23
合計（人）	120	137	128	95	96	72	54

基礎体験セミナーのグループ別協議の際によくでてくる課題として、「子どもとの接し方」が多い。具体的には、「子どもに適切な支援をどのように行えばよいのか」「ほめ方や叱り方はどうすればよいのか」等、様々な不安や悩みを抱えている学生もいる。そうした学生に対しては、セミナーの際に友達や先輩からアドバイスをもらったり、専任教員が普段の事前・事後指導の際に、指導を行ったりすることによって、次の活動では、少しでも自分の力量が高まるように取り組んでいる。

## (2) だんだん塾 (事前・事中・事後指導)

基礎体験活動を行う際には、必ず30分ずつの事前・事後指導を行っている。活動が長期にわたる場合は事中指導も行う場合もある。事前指導においては、体験活動の概要を知らせるとともに、活動の参加理由を確認し、活動を通して何を学び、どんな力をつけたいかなどの目的を明確にさせている。また事後指導では、活動の振り返りを通して自分の成長や課題を確認したり、他の参加者と学びの共有化を図ったりすることにより、体験学修の有意義感を持たせるように努めている。また、学生から出された課題に対しては、専任教員がアドバイスを送り今後の活動に向けての支援を行っている。これらの指導は4名の専任教員が地域割により分担して行っている。

毎回の事前・事後指導に費やす時間は専任教員にとって多大であるが、基礎体験活動の質の向上や意欲の継続には欠かせない活動である。

## (3) だんだん塾講演会

今年度は4回のだんだん塾講演会を開催し、多数の学生が参加をした(表4)。第1回だんだん塾講演会では、今後基礎体験活動において自分たちで企画・運営していく上でどのようなことが大切かを2週にわたり学んだ。第2回だんだん塾講演会では、グローバル化が進む中、最近の学校現場においても国際理解教育のニーズが高まっている状況を捉えて、国際理解ならびに日本理解と学校教育における国際理解教育の実際と方向性を考える機会を設けた。また、第3回だんだん塾講演会では、「伝える、伝わる話し方」というテーマで、自分の考えや思いを相手にわかりやすく伝えるためのテクニックや心がけなどを多く学んだ。第4回だんだん塾講演会では、現職小学校教員から担任の仕事内容や学級経営の大切さについて学んだ。



第2回 だんだん塾講演会

第2回だんだん塾講演会では、「伝える、伝わる話し方」というテーマで、自分の考えや思いを相手にわかりやすく伝えるためのテクニックや心がけなどを多く学んだ。第4回だんだん塾講演会では、現職小学校教員から担任の仕事内容や学級経営の大切さについて学んだ。

だんだん塾講演会は、これから教員採用試験や就職活動に向かおうとする学生にとって参考になるものが多く、来年度以降も数多くの学生が参加することを期待している。

表4 だんだん塾講演会の開催実績

回数	月日	講演者	講演テーマ
第1回	7月17日(水) 24日(水)	島根県立東部社会教育研修センター 研修調査課長 日野伸哉氏	「みんなワクワク!! 企画力UP セミナー」
第2回	11月20日(水)	島根大学教育学部附属学校園 片寄メーガン氏	日本に住んで 島根に勤めて - Casual thoughts about Japan by a Canadian woman -
第3回	1月15日(水)	フリーアナウンサー 河野美知氏	伝える、伝わる話し方
第4回	1月29日(水)	米子市立福米東小学校 教諭 矢吹なおみ氏	学校の担任って、何すればいいの?

## (4) 専任教員による日常相談活動

学生からの要望で、不定期ではあるが次のような日常相談活動を行った。

- 1) 基礎体験活動における個別相談
- 2) 生活面での個別相談
- 3) 教員採用試験に向けての願書添削や面接指導、小論文指導等

## (5) 島大ビビットひろば

島大ビビットひろばとは、松江市内の小学生の土曜日の居場所づくりのために活動を提供する目的で、教育支援センター主催で開催してきた基礎体験の事業である。今年で10年目を迎え延べ650人もの児童から参加申し込みがあった(表5)。学生たちはどのような活動をしたら子どもたちに喜んでもらえるのか、またそのためにはどのような準備が必要なのかなど、毎週のように話し合いを行った。事後指導では振り返りを行うが、「ビビットひろばの活動の後に、子どもから感謝の手紙をもらった」との報告もあり、学生たちもやり遂げたという満足感に浸ることもできた。このような活動は学生自身の企画力、指導力、コミュニケーション力の育成にもつながり、回を重ねるごとに活動への自信が見られるようになった。



後期 第2回ビビット広場

また、各専攻からも学生への専攻別体験として児童向けの講座を毎回開催してもらい、専攻での学びを生かした活動を提供してもらっている。

表5 ビビットひろばの開催実績

前期	実施日時・参加者数・実施講座名
第1回	平成25年6月15日(土) 9:30~12:00 申込み者166名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ・家政】
第2回	平成25年7月15日(月) 9:30~12:00 申込み者228名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ】
後期	実施日時・参加者数・実施講座名
第1回	平成25年11月9日(土) 9:30~12:00 申込み者127名 開催講座【教育支援センター・英語・国語・健康スポーツ・家政】
第2回	平成25年12月14日(土) 9:30~12:00 申込み者129名 開催講座【教育支援センター・英語・国語・健康スポーツ・環境寺子屋】
出張 ビビット	平成25年10月20日(土) 9:30~16:00 島根県立青少年の家のサン・レイクフェスティバルに出展

## 2. 各事業所との連携

基礎体験活動を推進していく上で、年間700件を超える多数の活動を提供して下さる事業所との連携を密にしていくことは、体験の量的充実だけではなく質の向上においても大切である。今年度も、基礎体験合同説明会を1回と基礎体験活動連絡会議を2回実施し、基礎体験活動の趣旨や期待する学び、募集手続き等についての共通理解を行った。また、意見交換を通して学生によりよい基礎体験活動の学びの場や環境を作るとともに、受け入れ事業所にとっても大学と連携することによるメリットのある活動のあり方や、学生募集の方法について話し合った。

### (1) 基礎体験合同説明会及び第1回基礎体験活動連絡会議

《平成25年4月17日（水）》

合同説明会 (14:30～15:30)	場 所：第2体育館 参加者：1年生176名、事業所27団体
連絡協議会 (15:45～17:00)	場 所：教養1号館2階201号室 参加者：事業所53名 支援センター6名

入門期セミナーⅠを終えた1年生は、基礎体験活動への意欲が高まり、そのセミナーの翌週に実際の受け入れ事業所を招いての基礎体験合同説明会を実施した。今年度は27の受け入れ事業所が参加して下さり、今年度予定されている活動内容等について、1時間のポスターセッション方式で説明していただいた。学生たちも各ブースをまわり、実際に体験をさせていただいたり、活動内容の話の聞いたりして、今後どのような基礎体験活動に取り組んでいこうか真剣なまなざしであった。



基礎体験合同説明会

また、本会議では、1000時間体験学修のねらいである、豊かな人間性と実践的な指導力育成に向けての取り組み方針や、基礎体験活動の流れ、事務手続き、緊急時の連絡方法等について説明し、学生にとって有意義な体験活動にするために双方の共通理解を図った。

### (2) 第2回基礎体験活動連絡会議

《平成26年2月18日（火）》

連絡協議会 (14:30～16:30)	場 所：模擬授業演習室他 参加者：事業所37名、支援センター7名
------------------------	-------------------------------------



各グループ別協議会

今年度の活動報告と学生の取り組み状況についての説明を行った。また、今年度も4年生が「4年間での基礎体験活動から学んだこと」について意見発表をし、参加していただいた事業所の方にも聞いていただいた。

その後のグループ別協議会は、主催団体別に学校教育、社会教育、各種団体等の3グループに分けて実施した。事業所からは、学生は意欲的に取り組んでいると評価していただいた。

また、学生の効果的な活用や学生の確保など、今後の取り組みに対する提案も多く出され、受け入れ先事業所同士の情報交換も図られた。

### 3. 実習セメスター

実習セメスターとは、3年生後期の教育実習（実習Ⅳ・Ⅴ）期間の9月から12月に実施している学外での学校教育体験活動であり、今年度で8年目を迎えた。教育実習での附属学校園での学びと、実習セメスターでの公立の幼小中高校での体験を互いに往還させながら、学校現場での学習支援の実践的な力を学生に身につけさせている。



6月下旬に説明会を開催し、その趣旨や目的などについて説明した。また、受け入れ先小学校の校長先生に来ていただき、今の学校の様子や今までの実習セメスターに参加した過去の学生の話をしていただいた。さらに、4年生に昨年度の体験の様子や学びについて発表してもらった。

#### 受け入れ先小学校長の話

8年間の実習セメスターの参加人数等の推移を図1に表したが、今年度は、延べ200名強の学生が実習セメスターに参加した。平成22年度までは活動範囲を山陰両県の提携市町村に限っていた（一般募集）が、平成23年度からは県外を含め母校での教育体験活動（母校体験）を認めるという経緯がある。その結果、今年度、母校での教育体験活動を行った学生は38名という結果であった。

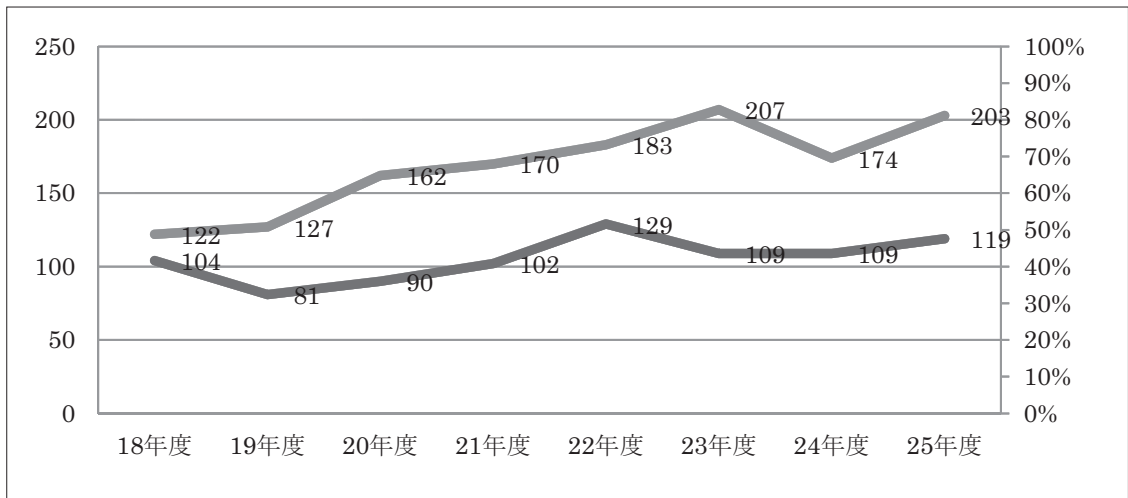


図1 実習セメスター学校教育体験活動の参加人数等の推移

参加した学生からは「実習を終えてから行くセメスター体験は、自分の課題や強みを知った上で参加できるので学びが深くなっている」「教育実習では見られなかったことや考えなかったことに日々出くわすから」等の感想が聞かれた。こうした感想から、学校現場の先生方から学習支援の在り方や園児・児童・生徒とのかかわり方等等幅広くご指導いただき、学生自身にとっても大きな学びになったことが伺える。

また、実習semester実施後、受け入れてくださった幼小中高校にアンケート調査を実施し参加学生の様子について評価をしていただいた(図2-1~2-5)。

図2-1 参加意欲・態度

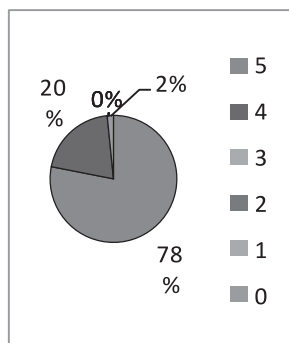


図2-2 子どもへの接し方

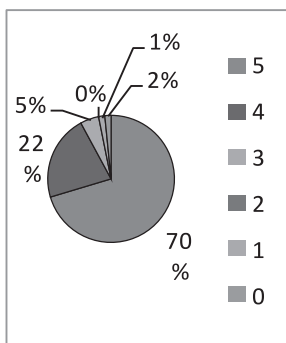


図2-3 学習支援の姿勢

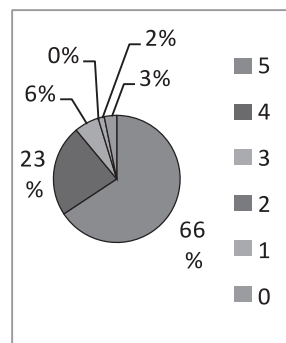


図2-4 挨拶等マナー

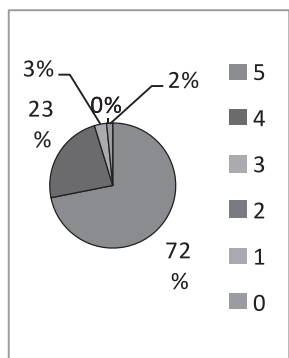
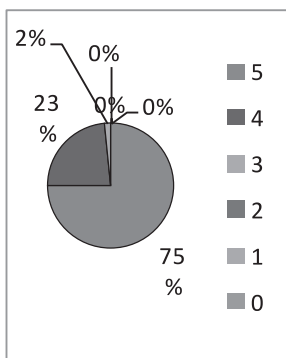


図2-5 服装等生活面



学生の評価	平均値
参加意欲・態度	4.79
子どもへの接し方	4.62
学習支援の姿勢	4.56
挨拶等マナー	4.70
服装等生活面	4.73

※ 5 (とてもよい), 4 (よい), 3 (まあまあ), 2 (あまりよくない), 1 (よくない)

学生に対する評価を観点別によると、いずれの項目も評価が高い。参加意欲や態度、挨拶等マナー、服装等生活面については、学生自身が自主的に登録していることや教育実習を通しての指導など、大学での取り組みが成果を上げていると考えられる。

#### 4. 学内資格認定制度

教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は延べ14名であった。内訳は表6の通りである。

表6 学内資格認定者数

資格認定者は、基礎体験セミナーにおいて自己の体験活動で得た学びを伝えたり、様々な悩みを抱えている学生に対してアドバイスをしたりするなど支援を行ってきた。下級生にとって先輩たちの生の声は説得力があり、自分自身の数年

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	5名	2年生1名 3年生2名 4年生2名
学校教育サポーター	7名	3年生2名 4年生5名
コミュニティサービス・サポーター	2名	3年生1名 4年生1名



後の姿と重ね合わせながら熱心に聞いていた。ただセミナーでは、有資格者だけでは支援者が足りず、「正課ピアサポートプログラム」を利用して、支援者を集めることとなった。今後は、学内資格についての認知をさらに広めていく必要を感じる。

#### Ⅳ 基礎体験におけるアンケートからみる成果

基礎体験における平成25年度の学生の学びはどのようなものであったか、その学修成果や取り組みの実態について、各学年のセミナーで行った学生の自己評価アンケート、ならびに受け入れ先事業所からのアンケートよりまとめた。

##### 1. 基礎体験活動の評価について

基礎体験活動は、学部教育における教員としての学生の資質・能力の向上をめざし、地域の学校や社会教育施設との連携と協力により、学生により豊かな社会性や人間関係力を身につけさせ、教育的実践力を培うことをめざして実施しているものである。

基礎体験活動としてねらう力は、活動毎の振り返りに使用している基礎体験活動記録票や、プロフィールシートにも示されている、教師力10軸を基に作成したものである。そして、学年毎に実施している基礎体験セミナーでこの評価項目を基にして自己評価も行っている。

ここでは、1・2年生は基礎体験交流、3年生は応用期セミナー、4年生は発展期セミナーで行った平成24年度の自己評価アンケートとともに、受け入れ先の事業所からのアンケートを基に、今年度の基礎体験の学びを振り返ってみたい。

##### 2. 各セミナーで行った自己評価アンケート結果

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの教師力10軸に合わせた10項目（軸）と、その具体的目標である20項目の評価項目に設定している。

表7 基礎体験領域の自己評価項目一覧

##### 1) 学校理解

- ①それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。
- ②教師の仕事（授業実践・学級経営・校務分掌）を理解することができたか。

##### 2) 子ども理解（学習者理解）

- ①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。
- ②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。

##### 3) 教科基礎知識・技能

- ①学習支援する教科等に関する基礎的・基本的な知識や技能をもつことができたか。

##### 4) 学習支援のための指導技術（授業実践研究）

- ①学習支援のための基礎技術をもつことができたか。

##### 5) リーダーシップ・協力

- ①状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすることができたか。

②活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか。

③グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか。

6) 社会参加

①自ら進んで地域社会と関わりをもち、主として学外での活動に積極的に取り組めたか。

7) コミュニケーション

①学校や地域の方々と積極的に関わりをもとうとすることができたか。

②場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。

③実際の活動場面で子どもの話を聞き、それにきちんと答えることができたか。

④体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。

8) 探求力

①自分の長所や短所、これから伸ばしていきたい能力、克服すべき課題をきちんと把握できたか。

②仲間と協力して企画を立ち上げ、実施するところまで責任をもって行うことができたか。

③自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。

9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）

①社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。

10) リテラシー

①コンピューター等を活用して、体験に関わる必要な情報を収集したり、体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。

②参加した体験をふり返り、活動記録票をまとめたり、自己評価を整理したりできたか。

この10軸20項目の自己評価項目で、今年度の各セミナーの評価結果を表にまとめたものが、表8である。各評価項目とも、その結果を5段階評価の平均値で示している。

（表8中のⅠとⅡは、基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である）

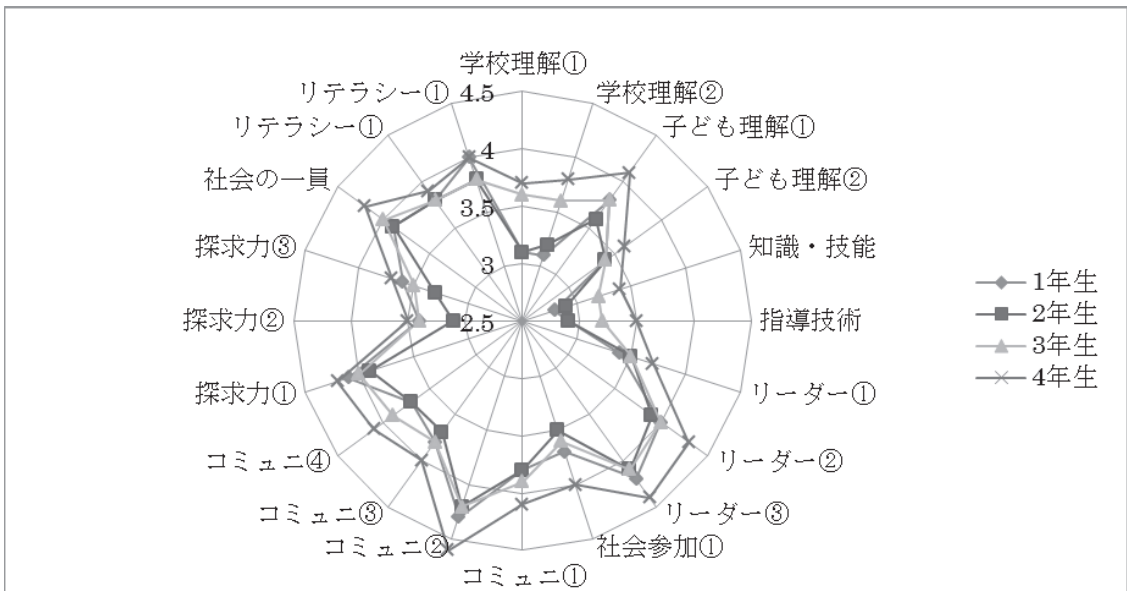
表8 学生の基礎体験の自己評価結果

学年名・評価の実施時期 ・調査人数		5段階自己評価の数値の平均値			
		1年生 2013年2月 175人	2年生 2013年2月 172人	3年生 2012年12月 168人	4年生 2012年9月 168人
	Ⅰ 取り組み	3.4	2.9	3.2	3.6
	Ⅱ 有意義感	4.0	3.8	4.0	4.1
1	学校理解①	3.1	3.1	3.6	3.7
2	学校理解②	3.1	3.2	3.6	3.8
3	子ども理解①	3.8	3.6	3.8	4.1
4	子ども理解②	3.4	3.4	3.4	3.6

5	教科基礎知識・技能	2.8	2.9	3.2	3.4
6	学習支援の指導技術	2.9	2.9	3.2	3.5
7	リーダーシップ①	3.4	3.5	3.5	3.7
8	リーダーシップ②	4.0	3.9	4.0	4.3
9	リーダーシップ③	4.2	4.1	4.1	4.4
10	社会参加①	3.7	3.5	3.6	4.0
11	コミュニケーション①	3.8	3.8	3.9	4.1
12	コミュニケーション②	4.3	4.2	4.2	4.6
13	コミュニケーション③	3.8	3.7	3.8	4.0
14	コミュニケーション④	3.7	3.7	3.9	4.1
15	探求力①	4.1	3.9	4.0	4.2
16	探求力②	3.4	3.1	3.4	3.5
17	探求力③	3.6	3.3	3.5	3.7
18	社会の一員としての自覚	3.9	3.9	4.0	4.2
19	リテラシー①	3.8	3.8	3.8	3.9
20	リテラシー①	4.0	3.8	3.8	4.0

さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、図3である。

図3 基礎体験の自己評価結果グラフ



今回は同一学年の4年間の変化を示したデータではないが、図1のグラフからわかるように、学年が進むにつれて、全体的に各項目の平均値が少しずつ上がっていくのがわかる。平均値の高いものとして、4年生の平均値を見てみると4.6のコミュニケーション②（場や相手に応じ

た挨拶や言葉遣いなどができたか), 4.4のリーダーシップ③(グループの仲間, 教員, 地域の方々と協力して活動することができたか), 4.3のリーダーシップ②(活動の趣旨を理解し, 組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり, 与えられた役割を果たしたりすることができたか)等があげられる。



発展期セミナーでの体験発表

逆に平均値の比較的低いものとしては, 平均値3.4の教科の基礎知識・技能, 3.5の学習支援の指導技術があげられる。これは, 教科の基礎知識・技能や学習支援の指導は, 教科の専門的な力量や指導経験が大きく影響するので, 他の項目より自己評価が低くなったものと思われる。また, 子ども理解②(幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか)についても, 子ども達はそれぞれ違う性格であり, 個に応じた対応のむずかしさを実感した結果と言える。

また, 学校理解①(教師の仕事を理解することができたか)のポイントが, 2年生より3年生のほうが高いのは, 3年生での教育実習や, 3年後期での実習セメスターでの学外学校体験を経験した影響が大きいと考えられる。

次に, 表8の基礎体験学修の「取り組み」の様子と, 「有意義感」の評価結果について述べる。

基礎体験学修の取り組み状況では, 学年毎に2.9~3.6と平均値に違いがみられる。例年2年生は, この値が1年生の時よりも減少するが, 今年度は, その幅が大きい。原因等を分析し, 対応をする必要がある。5段階評価で4又は5とした学生が, 1, 3, 4年生は50~60%, 2年生も50%弱はおり全体として熱心に取り組んでいるといえる。

また, 各学年の有意義感の回答結果では, 3.8~4.1の結果であり, 多数の学生が基礎体験学修に有意義感をもっていることがわかる。2年生の平均値は最も低い, 有意義感を感じている割合は, 86%と最も高い。活動を行いたいが, その時間の確保等が課題としてあげられる。

有意義感を感じる理由として整理すると次の3点があげられる。

#### 1) 子どもとのかかわり

- ・成長する姿, 発達段階を実感することができる。
- ・関わり方やコミュニケーションの取り方を実践できる。

#### 2) 支援・指導の実際

- ・授業や学習支援の現実を把握でき, 自分自身のスキルアップにつながる。
- ・日常の活動の在り方や教職等の仕事理解や体験ができる

#### 3) 企画・運営力の伸長

- ・企画・運営を体験することで, 責任感・手順を学んだり達成感を味わえたりする。
- ・様々な人との交流, 協力でき, 組織の在り方について考えることができる。

全体として, 社会人としての責務や貢献による達成感を感じることができることが大きい。

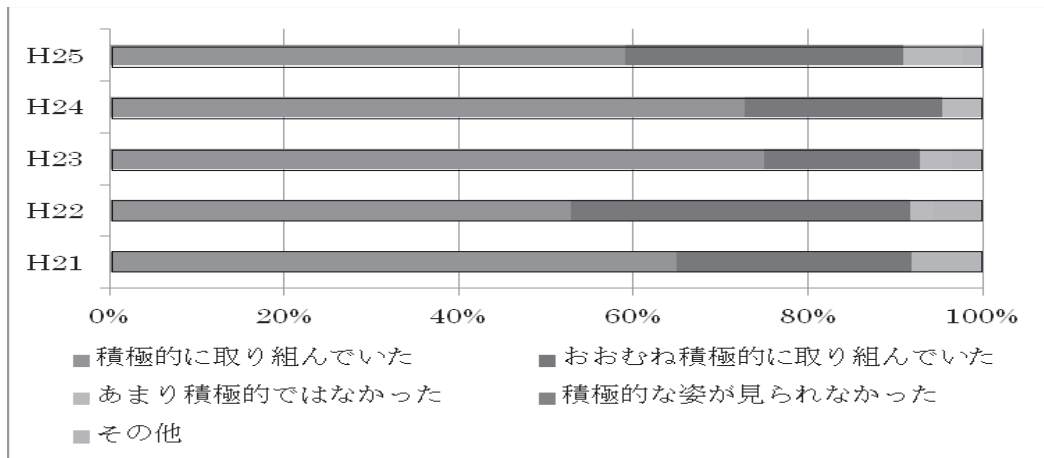
逆に有意義感を感じない理由として, 少数意見ではあるが, やらされている感を感じたり, 教職を目指さない学生にとっては, 役に立たないと感じたりしている。

### 3. 受け入れ先事業所のアンケート

教育支援センターでは、毎年受け入れ先事業所にアンケートを送り、基礎体験活動の学生の取り組みの様子を毎年度末に評価していただいている。その調査項目の1つである、「学生は体験活動へ積極的に取り組んでいましたか」の回答結果をグラフにしたものが図4である。

「積極的に取り組んでいた」と「おおむね積極的に取り組んでいた」を合わせると、例年90%を超えていることから、学生が体験活動に積極的に取り組んでいる様子がわかる。しかしながら今年度は「積極的に取り組んでいた」の割合が昨年よりも低いという結果になった。事前・事後指導や基礎体験セミナー等を通して、学生に指導していく必要性を感じる。

図4 受け入れ先事業所からの学生の取り組み状況のアンケート結果



次に、各事業所から送っていただいたコメントを紹介する。学生の意欲的な取り組みに対する好意的な内容が多かったが、その一方で「指示がなければ動かないではなく、もっと積極的に動いたほうがよい」や「メールを送信するときのマナー（自分の名前を必ず明記すること）」という意見もあった。

#### 【事業所からのコメント】

- 積極的かつ熱心に活動に取り組み、子ども達(園児)への接し方も温かく大変良いと感じている。事後に振り返り会をするが、各々に「学び」を得ておられることを学生の発言から感じている。
- 学生の前向きな姿勢に感心しっぱなしでした。学生1人1人が自分のこととして活動していた。
- 数を重ねていくほど学生さんは自信を持ち、子どもたちに笑顔で対応できるコミュニケーション力をつけているように感じる。
- とても素直で真面目な態度で取り組める。指導したことを応用する力、経験を考えて文章にする力、自分の気持ちを相手に伝える力、人の気持ちを察し考えたり受け入れたりする力を伸ばして欲しい。
- 継続的に入ってもらえると子どもの様子を分かってもらえてよいが、慣れたところに終わってしまい残念だった。来られるのを想定して計画していたときに休まれると困ることがあった。

## V 1000時間体験学修 10周年記念シンポジウム

平成16年度からスタートした島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間 体験学修（基礎体験領域、学校教育体験領域、臨床・カウンセリング体験領域）」は、平成25年度で10年目を迎えた。今までの10年を振り返るとともに、今後の1000時間体験学修の在り方を考えるために、シンポジウムを2月に開催した。



基調講演

独立行政法人教員研修センター理事長 高岡信也氏の基調講演をはじめ、本学の卒業生がこの1000時間体験学修で何を学び、そして学校現場等でこの体験をどのように活かしているのか発表していただいたり、「学生のうちに身につけておく力とは何か」というテーマのもとパネルディスカッションを行ったりした。

### 【プログラム】

【開会挨拶】 島根大学副学長 肥後功一		
第1部		第2部
【基調講演】		【パネルディスカッション】
演題		テーマ「学生のうちに身につけておく力とは何か」
「1000時間体験学修10年の歩みから見えてきたこと」		コーディネーター
独立行政法人教員研修センター理事長 高岡信也氏		島根大学教育学部附属教育支援センター長 大谷修司
【1000時間体験学修の成果と課題】		パネリスト
島根大学教育学部附属教育支援センター		島根県教育センター所長 長岡素巳氏
基礎体験領域 藤田耕一		米子市立弓ヶ浜中学校長 岡崎茂氏
学校教育体験領域 稲垣卓司		出雲市立第一中学校教諭 大下俊之氏
臨床・カウンセリング体験領域 足立智昭		米子市立伯仙小学校教諭 信田明子氏
【1000時間体験学修での学生の学び】		鳥取県船上山少年自然の家所長 藤井仁志氏
島根大学教育学部 2年生 中原由美子		【閉会挨拶】 島根大学教育学部長 秋重幸邦
3年生 山本海智		
【学校現場で活かされた大学での1000時間体験学修】		(役職名は当時のもの)
出雲市立第一中学校教諭 大下俊之氏		
米子市立伯仙小学校教諭 信田明子氏		

### ◆卒業生の発表



本学卒業の2名の先生に、学生の頃の1000時間体験学修の学びや現在の様子について発表していただいた。学生の時に学習支援活動や子どもとの関わる活動を行っていたために、現在の教科指導や学級経営に活かされている等の貴重な発表をしていただいた。

## ◆パネルディスカッション



パネルディスカッションでは学校教育・社会教育関係の方々に参加していただき、「学生を受け入れる際の思いや取り組み内容」「学生たちの体験先での学び」「学生のうちに身につけておく力や、体験活動をより発展させるための課題」等について討議をしていただき、今後の1000時間体験学修の進むべき方向についてのご示唆もいただいた。

## ◆1000時間体験学修追跡調査アンケート

このシンポジウムに向けて、卒業生に事前に1000時間体験学修に関わるアンケート調査を行った。詳細は「島根大学教育臨床総合研究 1000時間体験学修10周年記念号 1000時間体験学修追跡調査アンケート結果から得た成果と課題」に掲載しているが、大部分の卒業生がこの1000時間体験学修で学びがあり、学校現場で「子ども理解」「教科指導」「学校理解」等で、現在役立っていると回答していただいている。卒業生の声を一部紹介する。

- 「子どもの前に立つことに慣れているね。」と先生方に言ってもらった。また自分がどんなことを目指したいのか、考えをもって仕事ができている。
- 学校教育体験を通して、教材・教具の工夫が子どもの学びを深めることに気づいたので、日頃の授業でもそれを意識して実践することができている。
- グループワークの手法を実践でき、学級経営・生徒指導面でつながっている。

## VI 成果と今後の課題

## 1. 1000時間体験学修の達成と改善

今年度も多くの学生が、基礎体験活動に参加し、たくさんの学びを得た。学生の中には、教育実習で自分の課題を見つけ、それを克服するために学習支援の場を求め、基礎体験活動に参加した学生もいる。

今年度は1000時間体験学修10周年記念シンポジウムを2月に開催したが、卒業生のアンケート調査結果を見る限り、学校現場等でこの1000時間体験学修が活かされ、また役立っていることが検証された。学校現場の子どもたちが多様化する中で、学生のうちに基礎体験活動を通して学校や地域に出かけていき、子どもたちや地域の方とふれ合う意味合いが大きいことが証明された。

1000時間体験学修も10年を終え、この学修がさらに充実されるためには、今後「体験の学びの質」を高めていく必要があると考える。基礎体験活動の募集活動数が数年前と比較すると増加しているが、事業所の方との連携を更に密にし、大学側と事業所の双方から学生への支援や指導をしっかりと行い、学生が課題を活かして、次への活動への意欲につなげてほしい。

## 2. 実習セメスターの改善

一昨年度より母校での体験活動を取り入れ、山陰両県の協定市町以外の学校でも実施できるようにした。そうした結果、38名の学生が母校で実習セメスターを行った。しかし、「1000時間体験学修」並びに「実習セメスター」の認知度が低いため、受け入れていただいた学校への事前説明が困難なケースもあった。

また母校での体験活動を行う学生が増えたため、今後、山陰両県の協定市町村からの募集用紙を提出していただいても、学生が全く行かない不参加校が増加する可能性も考えられる。このことについては、今後しっかりと検討していかなければならないと感じる。